

The International Symposium/Workshop in Japanese Literary and Visual Studies 報告書

山吉頌平（早稲田大学）

日本のことを研究するのに、アメリカに行って意味があるの？というのは、本当によくたずねられる質問です。その先生のもとで学んでみたい、と思っていた教授がいるから、といった回答では満足してもらえないことも多く、ちょっとことばを足して、世界的な視野を身につけたい、といった漠然とした（そして使い古された）説明を試みたり、南方熊楠や鈴木大拙にあこがれて、という煙に巻くような理由を加えても、当然ながら余計に相手を混乱させるようです。今回はこの機会を使って、どうして私がコロンビアに留学することを決めたのかについて、簡単に述べることにいたします。

話は前後しますが、私が今回のワークショップで発表したものというのは、古代から近世にかけての、中央から見た北陸地方に対する見方の変遷、といったもので、そこに善光寺参詣路の変遷の問題や立山地獄、近世文学でよく扱われる題材などについての話を関連させて論じました。さて、もしこの主題をもってして日本で学会発表（講演ではありません）を行うとしたら、どの学会で発表できるのでしょうか。また、論文を投稿するとしたら、どういう媒体が考えられるのでしょうか。また、日本の文学部・文学研究科において、こうした時代も地域も、「日本文学」という枠組みをも越境した研究主題を選択することは、容易でしょうか。ここに私がアメリカでの研究を切望し、また恩師が私をコロンビアへと旅立たせた理由があるのです。ここでは、誤解を怖れずにいえば、何を研究してもよいのです。専門から踏み出すことは、禁忌ではなくて挑戦であり、学問領域を開拓して実りをもたらすものとして好意的に見られます。私が日本の恩師のもとで鍛錬させていただいたのは、なにものにも代えがたい財産ですが、日本の学界というものについては、時に息苦しさを感じていました。もともと、寺社縁起という、正統的な「文学」に属さず、また仏教学とも異なる領域を専門としていましたが、時に研究成果に対し、「これが文学研究といえるのか」といった意見を査読評などで受け取ることもありました。しかしながら、少なくともコロンビアではこうした否定的な評価を受けることはありません。教授陣も学生も日常的に「越境」を行っているのです。今回のシンポジウムも、日本文学と日本美術史の学問領域を越えた刺激的な議論が行われましたが、こうした「学際交流」というものは、当地では何も今回のような大きな学会だけに限らず、ごく自然に行われています。たとえば、シラネ先生のゼミに近代文学専攻の学生が出席するのはありふれたことで、美術史学や宗教学専攻の学生も積極的に参加しています。また、Donald Keene Center 主催の、外部の講師を招いての講演や、主に東アジアの宗教文化を取り上げる Buddhist Seminar といった行事も頻繁に行われていて、演者も聴講者も様々な領域を研究する人たちが集います。越境は日常なのです。学問に対する姿勢というものは多々あります。職人になりきるのを良しとする人もいれば、総合的な学を志す人もいます。ひとつの領域に縛られず、多くの権威のご意見をいただきながら、興味の赴くままに研究を進めたいと考えていた私にとって、コロンビアは最高の環境でした。以上が私のアメリカで日本学を学ぶことを選んだ理由です。